# 対話的な学びを引き出す協同学習の授業づくり

## －器械運動における運動・体育の好嫌の差異に着目して－

小林　慶（千葉大学大学院）

### １．目的

本研究では，器械運動単元において，対話的な学びの視点から協同学習を用いることによる効果や協同学習を用いた体育授業のあり方について，運動・体育の好嫌の差異に着目し，それぞれの実態から明らかにすることを目的とした。

### ２．研究方法

１）第一検証授業（令和４年９月実施）

A 中学校一年生の集団マット運動で,「運動好き×体育嫌い」傾向のある生徒２名を分析対象の生徒として抽出し,「チーム支援法（Metzler,M.W, 2011)」を用いて検討した。

２）第二検証授業（令和５年 11 月実施）

B 市立 C 中学校二年生の集団跳び箱運動で,「運動好き×体育嫌い」群の生徒 1 名,「運動嫌い×体育好き」群の生徒１名を分析対象の生徒として抽出し,栗田（2018）の授業手続きに基づき，検討した。また，運動・体育の好嫌を４群に分け，検討した。

３）分析方法

質問調査（単元前後の運動・体育の思考と愛好度の変容，その自由記述（第二)，協同することに対する変容（第二)，診断・総括・形成的授業評価)，発話分析などから分析を行った。自由記述は,KJ 法(川喜田，1967）を用い，分析を行った。

### ３．結果と考察

１）第一検証授業

質問調査の結果から生徒が主体的に取り組め，楽しさや学びがありつつ，グループでの活発な協力，対話の起こる授業であった。しかし，発話分析の結果からグループへの学習従事，貢献度に男女差があった点や関わり合い方が相手や授業時間，内容によって異なっていた点などがみられた。このことから，協同学習を導入してもその意図を生徒が認識していなければ,形骸化が起きてしまうことが示唆された。

２）第二検証授業

運動・体育の好嫌の差異に関係なく，単元の導入で社会的スキルの概念を学び，単元中も継続的に意識化し，学習カードを元に振り返りにも用いたことで，徐々に同スキルが身につき対話的な学びが促される可能性が示唆された。また，KJ 法による体育に関して生成分類されたカテゴリーとその記述内容から，協同学習への好感や体育への愛好度の高まりが推察された。協同学習を用いる体育授業のあり方として，社会的スキルの継続した学びと意識化が重要になると考えられた。しかし，「運動好き×体育嫌い」群を除く他３群では，技能差や周囲の影響が体育嫌いの要因になることが推察された。また,「運動好き×体育嫌い」群は，協同するより個人志向が強く，発話分析の結果から関わり合い方が相手によって異なる姿がみられた。

３）今後の課題

体育嫌いの要因である技能差や周囲の影響,「運動好き×体育嫌い」群にとっての体育授業のあり方，グループ内の人間関係や人数も考慮したグルーピングを取り入れた協同学習の検討などが今後の課題として挙げられた。

### ４．結論

協同学習を用いる体育授業のあり方として，ただ協同学習という方法を用いるのではなく，社会的スキルの継続した学びと意識化が重要であることが示唆された。

### ５．主な参考文献

１）川喜田二郎（1967）発想法．中央公論社.

２）栗田昇平（2018）体育授業における協同学習の効果的な適用を促す手続き：協同学習の代表的な 4 つのアプローチの統合を通じて．神戸医療福祉大学，19（1)：43-55.

３）Metzler,M.W.（2011）INSTRUCTIONAL MODELS FOR PHYSICAL EDUCATION, 3rd ed. Holcomb Hathaway, Publishers: Arizona, pp.245-247.